

インホーメーション サーキュラー

No. 17

1974年 2月

内 容

事務局変更のお知らせ	おもて表紙
I 第10回 運営委員会報告	1
II 日本発生生物学会・第7回大会の御案内	4
III 事務局よりの連絡	6
A. 学会費納入のおねがい	6
B. サーキュラーへの投稿のおねがい	6
C. 日本発生生物学会第7回大会の宿舎に関するお知らせ	6
D. 学会費の値上げについて	7
IV 岡田 要博士の御逝去をいたむ	7
V 研究機関紹介(その6) —— 愛知県心身障害者コロニー (その一)	8

日本発生生物学会

名古屋市千種区不老町 (〒464)

名古屋大学理学部生物教室内

このサーキュラーは名古屋の新事務局による最初の号です。

次期大会等の記事がありますのでしばらく保持下さい。

事務局と役員の変更のお知らせ

1974年1月1日より、事務局が下記に移り新しい役員が決まりました。新米で至らぬ点も多にあるかと思いますが、宜しく御願います。尚、暫らくの間は大阪市大でも残務が続きますが、御連絡は新事務局にお願いします。

新事務局：名古屋市千種区不老町 (〒)464)

名古屋大学理学部生物学教室内

電話 052-781-5111 内線 2503又は2512

振替口座番号 42801

新役員：幹事長 大西英爾

会計幹事 緋田研爾

庶務幹事 高橋進

インスタント人工海水

アクアマリン

姉妹品 ◇ボースアクアマリン(海水魚淡水魚同時飼育剤)アクアマリンM
(人口海水用添加液) アクマリンK (海藻育成液) 其の他

八洲薬品株式会社 水産事業部

大阪市西区京町堀1丁目145 TEL (441) 3036・3037・2191
3038・3039・1422

I 第1.0回運営委員会報告

運営委員会が1月28日名古屋の愛知会館に於て行なわれた。出席者は相山(会長), 速藤, 黒田, 小嶋, 金谷, 平本, 樋渡, 柳島(幹事長・旧), 大西(幹事長・新)の各運営委員, 岡田(節)(欧文誌編集主幹), 緋田(会計幹事・新), 小谷(会計幹事・旧), 高橋(庶務幹事・新), 神阪(庶務幹事・旧)。討議および報告事項は大略次の通りであった。

1. 事務局の引継ぎ

前回の運営委員会と第6回総会での議に基づき, 事務局が名古屋大学理学部生物学教室へ1月1日に引継がれた。新役員の構成や引継ぎについての新事務局からのお願いは別項を参照されたい。なお, 引継ぎにより, 日本発生物学会会則の付則第1条が変更されなければならないが, 事務局が変更される毎に付則を変えるのは煩わしいので, 次のように変更することが議され, 次の総会へ提案される。

第1条 本会の事務所は運営委員会の議をへて会長が委嘱する。

なお, 新幹事長から, 幹事の任期は規約上は何の規定もないが, 今回で2回目の引継ぎであり, 一応前例ともなるので, 下記のようなルールを今後暫らくの間は踏襲しては如何と発言があり, 諒承を得た。

(a) 事務局の所在は本来固定されるべきであり, 又, 馴れた人が役員を続けることは会にとって望ましいには違いないが, 会の財政上, 専属の事務員を置く余裕は無く, 止むを得ず役員が多く負担を負う結果となるので任期は一応2ケ年としたい。(b) 任期は1月1日より始まり, 2年目の12月31日までとするが, (c) 引継ぎ後, 6ヶ月内外は残務処理のために新旧両役員のオーバーラップを認めてほしい。

2. 1974年度の暫定予算 別項参照

なお, 財政が大変に苦しくなって来たので, DGDの超過ページの著者による負担は12頁以上からとする(現行16頁), 別刷50部の無料サービスは廃止すること(以上Vol.16より), が議せられ, 承認された。また, 非会員の投稿者には会員加入の勧誘文を出すことになった。また, DGDの機関購入は年間6,000円とする。

3. 会費値上げについて

諸経費の高騰により、正常な予算が組めなくなつたので、少なくとも1,000円の値上げが必要であるとの結論となつた。具体案は次回●運営委に提出され、総会にはか
られる。

4. 会長・運営委員の選挙について

1975～1976年度の会長・運営委員の選挙を11月中旬投票締切のスケジュールで行なうこととなつた。尚、経費節約のため、選挙ごとに毎回配られていた会員名簿は今回は印刷しないこととし、会員名のリストにより代えることが提案された。

5. 選挙方法の変更

前々から、運営委員の選挙については、色々問題点が指摘されていたが、次のような小変更が提案された。討議の上、成文化して次回の運営委員会で討議の上および総会に提出される。

(a) 選挙管理委員を3名(そのうち1名は長)に減らす。そのほか、立会人若干名を加える。事務は事務局で行なう。

(b) 現行の規約では、運営委員の選出に際し、14名連記であり、その数に過不足があった時は全部無効となるが、14名以内の連記でも有効とする。14名を超えたときは現行通り無効とする。

6. 第7回の大会の準備状況の報告 4頁別記参照

7. 第8回大会の予定地

候補地として、東北地区(仙台、山形)、中国地区(広島、岡山、愛媛)、埼玉地区が考えられた。次回の運営委員会で決定され総会に報告予定。

8. 欧文誌委員会、および単行書委員会よりの報告

DGDの編集主幹はVol. 1.6より岡田節人に引継がれる(サーキュラーNo.16参照) DGDに関する問い合わせは、火、水、金曜にお願いしたい旨の発言があった。新単行書委員を下記の諸氏にお願いする旨会長より報告があった。

金谷晴夫(委員長)、江口吾朗、日高敏隆、丸山工作、毛利秀雄、竹内郁夫、山名清隆

昭和49年度暫定予算

(1月28日運委での決定)

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	1,360,100	DGD印刷製本費	4,600,000
会費	1,000,000	(Vol. 15# 2.3.4. 2,500,000)	
DGD売上げ	1,600,000	(Vol. 16# 1.2.3. 2,100,000)	
文部省助成金 (S. 48)	540,000×2	DGD編集局経費*	1,160,000
岩波単行本売上げ	440,000	事務局経費 (630,000)	
基金一部繰入れ	200,000	アルバイト費	300,000
DGD編集局前年度残高	88,928	通信費	200,000
DGD広告代金	200,000	幹事手当	60,000
利息	40,000	交通費	40,000
超過頁著者負担	200,000	事務費	70,000
計	7,109,028	第7回大会講演要旨	
		印刷費	350,000
		運営委員選挙費	40,000
		運営委員会経費	
		(交通費・宿泊費等)	120,000
		サーキュラー印刷費(年3回)	90,000
		第7回大会援助費	50,000
		払込料金	15,000
		予備費	14,028
		来年度繰越金	0
		計	7,109,028

* DGD 編集局経上費

単位(万円)

編集局雑費(文具, 資料, 手当)	25
運営委員会開催費用(2回)	6
主幹事手当	5

幹事手当		3.5
主幹編集事務補助手当(1名)		1.4
幹事補助者手当(2名)		2.4
英文校閲謝礼		2.0
旅費		3
前年度未払い分(印刷関係)		1.0
昨年度未払い分(幹事手当 35,000)		
昨年度未払い分(選挙費 20,000)		5.5

Ⅱ 日本発生生物学会・第7回大会の御案内

すでにサーキュラー№16でお知らせ致しましたが、第7回の大会は6月20日、21日、22日の3日間名古屋に於て行なわれますが、準備委員会は次のスケジュールを決めました。細部につきましては、今後変更されるかも知れません。多くの方々の御参加をお願い致します。期日が昨年より大巾に繰り上りましたので、締切日に御注意下さい。

1. 大会日程

	6月19日(水)	6月20日(木)	6月21日(金)	6月22日(土)
午前		一般講演	一般講演	一般講演
午後	運営委員会	一般講演	総会 一般講演	一般講演
夕刻		一般講演	招待講演	

前にもお知らせ致しましたが、一般講演は動物、植物、微生物は区別せず一会場で行ないます。招待講演は会員の多くの方々とは専門の異なる方をお願いするつもりで準備委員会の方でも検討しておりますが、一般会員の方々からも御推薦下さるようお願い致します。

2. 会 場

愛知県勤労会館（名古屋市昭和区鶴舞町）

（サーキュラー№16で予告しました産業貿易館から変更になりましたので御注意下さい。）

3. 参加ならびに講演の申し込み

a) 参加希望者はサーキュラー別紙添付の申し込み票に必要事項を記入の上、大会参加費1,500円（学生・院生1,000円）をそえて、3月15日（必着）までに

名古屋市千種区不老町（☎464）

名古屋大学

理学部 生物学教室 高田健三

（TEL 052-781-5111, 内線2503）

まで御申し込み下さい。御送金には必ず添付の振替用紙を御使用下さい。なお、払込通知票の受領証をもって、大会参加費の受取りにかえさせていただきます。（振替口座番号は名古屋50490です）

b) 講演希望者には所定の原稿用紙を郵送しますので、御記入の上、下記宛御送付下さい。締切日は追って御知らせ致します。

名古屋市千種区不老町（☎464）

名古屋大学理学部生物学教室内

日本発生物学会・第7回大学準備委員会

c) 講演は従来通り1人1題です。（但し共同研究者として加わっておられる場合はこの限りではありません）

d) 講演時間は討論を含めて1題20分を予定しています。

4. 講演要旨集は、大会への参加の有無にかかわらず、会員全員にあらかじめ配布いたします。なお、大会時に再交付はいたしませんので、当日お忘れなく必ず御持参下さい。

5. 宿泊について 別記（6頁）参照

6. 大会についての御問合わせ、御意見は準備委員会まで御申し出下さい。

準備委員会庶務担当

名古屋大学理学部生物学教室

大西英爾 または、石崎宏矩

(TEL 052-781-5111 内線2503または2512)

Ⅲ 事務局よりの連絡

A. 会費納入のおねがい

学会の会計が諸物価の値上り、会費滞納などのため大変苦しくなっています。誠に恐縮ですが会費の前納に御協力下さる様、お願い致します。会費は同封の赤色振替用紙にてお払い込み下さい。念のため、年間会費は3,500円です。

加入者名 日本発生物学会

口座番号 名古屋42801

B. サークュラーへの投稿おねがい

学会員相互の交流のためいろいろな話題をおよせ下さい。学問上のこと(たとえば、意見の交流を求める話題の提供、トピックスの紹介、国際会議の様子、など)、研究室の紹介、学会への意見などいろいろあると思います。ふるって投稿して下さい。なお、原稿は事務局、庶務幹事、あてお送り下されば、幸いです。

C. 発生物学会・第7回大会の宿舎に関するお知らせ

学会事務局では、第7回大会に際して宿舎のあっせんは致しませんが、下記の宿舎が便利かと思しますのでお知らせします。

○名古屋共済会館(国家公務員共済組合)

名古屋市中区三の丸一丁目五番一号

〒107, (TEL. 052-201-3326)

○愛知会館(私立学校教職員共済組合)

名古屋市東区赤萩町二丁目52番地

〒461, (TEL. 052-936-5171)

○王山会館(公立学校共済組合)

名古屋市千種区覚王山通り八丁目一八番地

〒464, (TEL. 052-762-3151)

なお名古屋の日本交通公社のTELは052-563-1501です。

D. 学会費値上げについて

前述の運営委員会報告にもある通り、現在学会費の値上げが、検討されています。別表の今年度の暫定予算案にもみられる様に、正常な予算を立てるのが苦しくなりつつあります。その主な原因は、印刷関係費用(紙代、印刷費等)の値上りです。加えて諸物価の値上り、会員の学会費の滞納がめだつことなどが益々学会の財政を圧迫しています。過日の運営委員会においてもいろいろの対策が出され、検討されましたが決定的なものはなく、現状では学会費の値上げ(1,000円程度)も止むを得まいという意見が大半を占めています。

今後、いろいろなところで議論がなされると思いますが学会員諸氏においても、別項の今年度暫定予算案を御参照のうえ御検討下さる様おねがいします。また、できるだけ会員数をふやすことにも御協力ねがえれば幸いです。

Ⅳ 岡田 要博士御逝去をいたむ

岡田 要博士は、かねてより病氣療養中のところ昨年12月26日に死去された。明治24年生れ、享年82才であった。

岡田 要博士は、東京帝国大学理学部動物学科を卒業後、京都大学および東京大学で教鞭をとられ、その間、実験形態学を含む生物学の広範な領域にわたり数々の優れた業績をのこされた。東京大学を退官後は、昭和41年まで国立科学博物館長をつとめられた。我国の自然科学界に残された功績、影響は、はかり知れないものがある。

このことは、日本の発牛生物学にとってもまた例外ではなかった。日本発牛生物学会は1968年5月に発足したが、その設立に到るまでには長い道程があった。すなわち、発

生学関連の三団体（実験形態学会，発生学協会，発生学談話会）の長い活動が必要であった。岡田 要博士は，実験形態学会を1948年に創立し，その会長を長い間つとめられ，文字通り日本の発生生物学のリーダーシップをどってこられた。この間，戦前，戦中，戦後と，日本全体が激しく揺れ動いた時期であっただけで，その辛苦は，想像を絶するものであったと思われる。日本発生生物学会の中にも直接，間接に岡田 要博士の御指導を受けた会員も多く，偉大な指導者を失った無念さは言葉では云いつくせない。心から博士の御冥福を祈りたい。

岡田 要博士の略歴

明治24年8月，兵庫県相生市に生まれた。明治45年名古屋第8高等学校入学。その後東京帝国大学理学部動物学科を卒業。東大助手を経てヨーロッパに6年間遊学。昭和5年帰国後，京都大学教授，東京大学教授，同理学部長を歴任されるとともに，日本学術会議第4部部長・日本動物学会会頭や実験形態学会会長をつとめた。東大教授退官後は同大学名誉教授に推され，長らく国立科学博物館長の任にあった。また，斯学への貢献により日本学士院会員・文化功勞者に推された。

（S. T. 記）

V 研究機関紹介（その6）

愛知県心身障害者コロニー 発達障害研究所

（Institute for Developmental Research）（その一）

発達障害研究所は1972年4月愛知県コロニーの22万坪の敷地の中に心身障害児の発生原因，治療・療育，福祉の探求の為に設立された研究所で，10部24研究室から構成され，発生学に関心の深い部，研究室が多い。現在村上氏廣所長の下に日本先天異常学会の編集事務局がある。

遺伝学部門細胞遺伝研究室

主にヒトや哺乳動物について，細胞または染色体の形態学的変化を表現形質との関連からとらえ，遺伝子の働きを形質発現のなかに求めようと努めている。

1. 先天異常の細胞遺伝学的研究（大石英恒，孫田信一）：先天異常個体の染色体を分析

し、異常染色体と表現形との対応性を求める。また染色体異常の成立した時期とその原因を追求するとともに、その異常染色体が世代を通して保持されるための染色体の機能的単位について研究を進めている。

2. 哺乳動物の発生初期における染色体異常に関する研究(孫田信一、大石英恒):染色体異常をとともなう先天異常の発生原因を追求する手掛りの1つとして、チャイニーズハムスターなどの実験動物を用いて種々の段階の生殖細胞にX線照射や薬物投与をおこない、これらの影響を受けた細胞がその後の個体発生にどのように関与するかを調べている。

(大石記)

発生学部門第一研究室

先天異常の成因ならびに成立機序の解明を研究目的とし、主として中枢神経系の異常発生の機転とその発達について基礎的研究を行なっている。

胚の異常発生の誘因として、物理的作因ではX線、化学物質ではグルタミン酸ソーダなどを用い、妊娠動物を処理し、表現型模写を作出することにより発生過程を動的に追跡している。X線照射では多様の脳障害が成立し、その成立機序を追求するとともに、生理学部門と共同して生後の行動との関連を検討している。グルタミン酸ソーダ処理による胎仔脳では視床下部細胞に特異的に核濃縮がみとめられ、さらに電顕による検索を進めている。

また、近交系実験動物に散発する異常な表現型の選抜分離を試み、その発現様式について発生遺伝学的解析を意図し、脳の遺伝性発生障害を発現するマウスを観察している。

(東海林隆次郎記)

発生学部門第2研究室

結合組織は、生体の形態ならびに機能の面からみてきわめて重要な意味をもっており、発生学部門第2研究室は、その発生、分化、成熟などの正常と異常の問題につき、生化学と形態学の両面からの追究を試みている。

実験的には、過剰ビタミンAや硫酸タリウムによるラット軟骨ムコ多糖合成能の変動と形態異常、正常ラット長管骨軟骨の成長にとともなうムコ多糖の変動や蛋白糖複合体の軟骨層別分析、脱灰凍結乾燥骨の生体内移植による軟骨内骨化機序の解明、さらに脱灰凍結乾燥骨と筋組織を使用する培養系における軟骨誘導因子の追究などをおこなっている。

臨床的には、ムコ多糖代謝異常症、I-Cell病について生化学と電顕の両面より検索

を続けている。

(野上 宏記)

周生期学部

人員：部長—村上氏廣；室長—山村英樹；研究員—仙波禮治，慶野宏臣，佐藤 浩；研究補助員—太田恵子，佐藤美保子。

テーマⅠ：核黄疸の発生機序および予防に関する実験的研究

新生および幼若ラットに核黄疸を誘発する実験系を確立することに約1年間専念してきた。現在，この実験系およびモデル動物ガンラットを用いて，ビリルビンの血液より脳への移行を促進する因子および抑制する因子を見つける研究に着手したところである。(山村ほか全員)

テーマⅡ：神経管閉鎖障害の発生機序に関する実験的研究

マウス胚における神経管閉鎖過程およびカドミウム塩による閉鎖障害の発生過程の光学ならびに電子顕微鏡的観察を行なっている。(慶野，仙波，佐藤美，山村，村上)

生理学部門 筋萎縮症研究グループ

遺伝性筋萎縮症マウスの病因を分子レベルで解明することを研究目標とする。使用しているマウスは，C57/BL-6Jdyで，劣性の遺伝子であるため，dyホモ(dy/dy)の個体が発病する。興味あることは，発病するのが生後3週くらい(ほぼ離乳期にあたる)になってからであることと，発病個所が必ず後肢であることである。現在，このホモ(dy/dy)の個体を我々の研究室で，年間60頭程生産しており，一部は，形態学部門と遺伝学部門に提供している。

1. 罹患筋から，筋収縮に関連する蛋白質を単離し，量的，質的に異常があるかどうか検討してきた。ミオシンについては，含量が罹患筋で異常に低いけれど，精製したミオシン分子のヘリックス含量とサブモレキュラー構成においては異常は認められなかった。
2. 筋萎縮症の特徴として，筋細胞内酵素(例えばCPK)の血中への漏出が上げられる。このことは，筋細胞膜に異常があることを示唆している。そこで，罹患筋から細胞膜を単離し，その分画過程の特徴，単離細胞膜の機能的解析と構成成分の分析を行なっている。この研究については，形態学部門の人と共同研究を行なっている。
3. 体液性調節異常が考えられるので，その一つの目安として，金属イオンの分布の様子を種々の組織について研究している。

4. 筋萎縮症とは直接関係ないけれど、生体の金属イオン分布の調節機構に関する研究の一つとして、妊娠マウスの母体に投与された Cd^{++} が、どのような時間的経過をもって母体の各組織に浸透し、また、特に胎児の金属イオン環境にどのように影響していくかを、周生期学部門の人と共同研究を行なっている。 (戸塚 武・渡辺貴美記)

形態学部・形態学第一(微細構造)研究室

研究はすべて電顕および電顕細胞化学の方法によって進められており、これら技術自体の改良・開発にもかなりの時間をさいている。主に追求している材料・テーマは次の通りである。

1. 電顕細胞化学の方法の改良・開発
2. 細胞内小器官の形態と機能の分化と発生、—主に Iysosome, Golgi 装置等を対象にしている—
3. 細胞分裂
—胚、再生肝等を用いて分裂装置、細胞内小器官の動態を中心に解析している—
4. 哺乳類(主にマウス)の初期発生

細胞分裂はもとより細胞内小器官の動態も把握しなければ細胞分化は真に理解することが出来ないのではないか、というのが我々の基本姿勢である。斎藤多久馬、加藤裕美のほか来原兄忠、仁王似智夫、深谷皓考が共同研究者として研究に従事している。

(斎藤 記)